

書評…川村俊夫「戦争法」を廃止し改憲を止める

—憲法9条は世界の希望—（学習の友社）

五十嵐 仁（法政大学大原社会問題研究所前教授）

〔以下の論攷は、『しんぶん赤旗』2016年6月5日付、に掲載されたものです。〕

論点を整理 たたかう意義解明

そのものずばりの本である。いま最大の課題になっている「戦争法」（安保法制）の廃止と

改憲阻止に向けての理論的検証が本書の課題だからだ。2000ページに満たないコンパクトさだが、戦争法と憲法9条をめぐる経過と論点を手際よく整理され、学習会などのテキストとして最適だと言えよう。

著者は1965年に憲法改悪阻止各界連絡会議（憲法会議）結成と同時に事務局専従となり、2004年の9条の会発足と同時に事務局員になっている。まさに9条護憲と戦争法反対運動を担ってきた歴戦の強者（つわもの）である。本書にはその戦歴が十分に生かされており、事実をふまえた論述には説得力がある。

本書は5つの章からなっている。戦争法についてのデタラメな政府説明を反駁した第1章と憲法9条をめぐる戦後70年間のせめぎ合いを振り返った第4章は、読者の記憶を呼び起こし、問題となった事実や論点を整理するうえで有益である。

憲法9条制定のプロセスを振り返って原点を検証した第2章と戦争違法化に向けての国際社会の動きを検証した第3章によって、憲法第9条がもつ歴史的・先駆的内容とその意義を再確認し、憲法8条こそ「最先端」で「世界の希望」であることが理解できる。第5章は、自民党改憲案の危険な内容を簡潔に批判し、それを許さない闘いの意義を明らかにしている。

戦争法は成立したが、2000万署名運動や野党の共同など闘いは続く。参院選は戦争法を廃止して「新しい歴史を切り開く正念場」になろうとしている。この闘いの武器として、本書が広く活用されることを望みたい。